



発行所
東海愛知新聞社
〒444-0852 岡崎市南明大寺町12-4
電話 0564-51-1018
FAX 0564-51-1018
Eメール tokai-a@m2.catvmics.ne.jp

敬語はどう変わってきた？

調査地・岡崎で報告会 国語研究所

国立国語研究所(東京都立川市)が岡崎市で行った「ことばの調査」の報告会「敬語は生きていく」が二十九日、岡崎市図書館交流プラザ(りぶら)で開かれた。調査に協力した市民ら約百五十人が参加。所員らによる研究報告のほか、調査に応じた市民二人が参加した座談会もあった。

調査は今回が三回目、第一回が昭和二十八(一九五三)年、第二回が四十七年に行われている。普段の生活のなかで敬語がどのように使われているかを直接面談で調査した。調査人数は三百八十八人。うち三回続けて調査対象になった人が二十一人いた。

調査は今回が三回目、長が「繰り返し調査」の意義や方法を説明。岡崎市が方言と共通語が混在する地方都市として選ばれたことも話した。

所員らから、「お描きになられる」のようなど重敬語形の使用率が三十代から四十代で高い反面、「お描きになる」が減少していることや、十代、二十代

で「です、ます」をつけた表現を敬語とする割合が高いことが報告された。三回の調査すべてに回答した門前町の弓具店経営、林忠茂さん(八)と、今回参加した伝馬通の呉服店経営、奥瀬勇作さん(八)が出席した座談会では、会場からも何人かの発言があり市民の関心の高さがうかがわれた。林さんは「敬語を含

めた豊かな日本語を残すために、こうした調査を続けてほしい」と要望し、奥瀬さんは「調査に協力できてよかった。パソコンの説明のように分かりにくい日本語をなんとかしてほしい」と発言した。



座談会に出席した(右から)林さん、奥瀬さんと杉戸所長ら＝岡崎市図書館交流プラザで